

ダライ・ラマ 14 世が用いる「心」にかんする仏教用語の英訳語について—感情・光り輝き知るもの・認識手段について—

The English translation concerning Buddhist terms of “mind” by the 14th Dalai Lama—emotion, luminous and knowing, and valid cognition—

辻村優英(高野山大学密教文化研究所受託研究員)

TSUJIMURA Masahide(Visiting Researcher of the Research Institute of Esoteric Buddhist Culture, Koyasan University)

1 仏教と近代科学の対話—Mind & Life Institute の活動とその意義

1980 年代後半以降、仏教と神経科学あるいは脳科学との関連が注目され、科学誌上でそれにかんする著述が発表されている。例えば *Science* 誌に掲載されたものでは、Marcia Barinaga "Studying the Well-Trained Mind"(Science 3 October 2003: Vol. 302 no. 5642 pp. 44-46)、"The Mind: Buddhism and Biology"(Science 12 April 1991: Vol. 252 no. 5003 p. 206)、Yudhijit Bhattacharjee "Neuroscientists Welcome Dalai Lama With Mostly Open Arms"(Science 18 November 2005: Vol. 310 no. 5751 p. 1104)、Esther Sternberg "A Compassionate Universe?"(Science 3 February 2006: Vol. 311 no. 5761 pp. 611-612)、Greg Miller "A Quest for Compassion"(Science 24 April 2009: Vol. 324 no. 5926 pp. 458-459)、などを挙げることができる。*The Journal of Neuroscience*(2009)掲載の"Mental Training Enhances Attentional Stability: Neural and Behavioral Evidence"と題する論文では仏教の瞑想が脳に及ぼす影響について論じられ、そのなかでダライ・ラマ 14 世（以下、ダライ・ラマと略す）の著作が引用されている。

仏教と神経科学などの近代科学との接触に対する注目を一層確実なものとした要因の一つとして、ダライ・ラマが深く関わっている Mind & Life Institute という組織の活動を挙げることができよう。1983 年にカリフォルニアにてダライ・ラマが現代科学に興味を持ち科学者たちとの対話を強く望んでいることを知った Adam Engle(ハーバード大学やスタンフォード大学で学び、M.B.A.を取得)がそうした機会を設けようとしたことと、同年オーストリアで開かれた神経科学と意識にかんするシンポジウムにて、オートポイエーシス理論で著名な生物学者 Francisco J. Varela とダライ・ラマが出会ったことが Mind & Life Institute(以下 MLI)を立ち上げる契機となった。1987 年、ダラムサラにあるダライ・ラマの住居の

一室にて仏教と認知科学(Cognitive Science)の対話が1週間にわたって開催された。その時の参加者はダライ・ラマをはじめとして6人の科学者と2人の通訳者および数人のオブザーバーであった。これがMLIの第一回目の会合であった。その後ほぼ毎年開催され、2011年までの24年間で計23回の会合がもたれている¹。各回のテーマは認知科学・神経科学・脳科学・量子力学・心理学・倫理学等、多岐にわたっている。MLIは"Love, Mindfulness and Compassion"、"Trust and Integrity"、"Teamwork and Collaboration"、"Impeccability and Continuous Improvement"、"Open Communication and Transparency"という5つの価値観に基づいて活動を展開し、「注意・感情的バランス・親切心・思いやり・自信・幸福といった心の質を養う実践の発展と普及へと導く、心についての厳密で複数分野にわたる科学的調査を支持し促進すること」(to promote and support rigorous, multi-disciplinary scientific investigation of the mind which will lead to the development and dissemination of practices that cultivate the mental qualities of attention, emotional balance, kindness, compassion, confidence and happiness)をその活動の目的としている。

こうしたMLIの試みはチベット仏教の近代化という問題と深く関わる。高松宏實(クンチョック・シタル)によれば、「生死輪廻や因果関係の法則は、当然、近代の世界観と科学的な思考によれば、簡単には証明できない非科学的な考え方と言われてしまうのは当然のことと言えよう。しかしながら、これは、もとは生まれ変わりという理論から成り立ってことであり、意識と物質の根本性質は別々であって、意識のもと意識以外にはなく、物質から意識を生み出す事はないという、ダルマキールティを含めたインドの仏教論者の理論に基づいている。したがって、チベット仏教の側から見ると、心や意識について、科学的にどう位置づけるかということが問題になってくる。科学的には、心の働きや感情のもとには脳に位置づけられるとすることが多いが、これは、チベット仏教の認識においては満足できる説明ではない。こうした輪廻転生などチベット仏教的な考え方を、これからもチベット仏教は自信をもって説き続けるのか、それとも近代の考え方に合わせてトーンダウンさせていくのか、という問題に直面する日が来るだろう。しかしチベット仏教は、その矛盾は承知しているものの、将来の最先端の科学が、いつの日か心の本質をより一層突っ込んで解明する時が来るのではないかという望みを持っている。チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマ 14 世もこのことをよく認識している[高松 2010: 165]。ダライ・ラマは理論物理学者David Joseph Bohm(1917-1992)の論文集の巻頭に言葉を寄せ、Bohmを“one of my scientific ‘gurus’”[Bohm 2003]と評しているし、近代科学と仏教との対話に可能性

を見出している²。また、前亡命チベット政府首相でゲルク派の高僧であるサムドン・リンポチェは、「科学(tshan rig)が内明(nang don rig pa)に依り、内明が科学に依れば、世間に大いに役立つこととなるに違いない」³と述べ、近代科学と仏教の対話に期待感を示している。

西洋の近代科学側では、仏典の言葉から大きなインスピレーションを得る科学者たちがおり、「諸行無常」「諸法無我」「色即是空」といった諸概念が彼らの持っている洗練された科学的原理と比肩するものであると考えられ、物理学をはじめとする諸科学への応用が試みられているという状況がある[Lee 2006: 26]。野家伸也によれば、MILの創立者の一人である Francisco は、人間経験をその反省的な側面と直接的な生の側面の両方で検証しようとする伝統を探し求めた結果、仏教の「三昧」にたどり着いた [野家 2008: 63]。

MLIの試みは、心や意識を科学的にどう位置づけるかという問題意識をもつチベット仏教側と、仏教からインスピレーションを得ようとする科学者側が歩み寄った結果であったといえるだろう。

そこで目指されているのは心に関する分野横断的な研究であるが、その際に避けて通れないのは言葉の問題である。村上保壽によれば、「宗教と科学の対話を考えるならば、その対話の成立条件として次のことを考えておかなければならない。すなわち、宗教と科学の双方が理解できる共通の言葉で対話しているかどうか、その言葉が共通の意味内容を表現しているかどうか、そして、その意味内容の違い・差異が双方に了解されているかどうか、という諸点である」[村上 1995: 100]。

MLIで主導的な役割を果たすダライ・ラマの母語はチベット語であるし、心にかんする諸概念も基本的にチベット語の仏教用語に基づいている。他方、科学者たちの共通言語は英語であり、チベット語の仏教用語に精通しているわけではない。

したがって、この両者が対話する MLI の課題と重要な意義は、仏教と近代諸科学の概念の英語によるすり合わせであると言えよう。分野横断的研究をすすめるにあたって、これはかかせない作業である。

本稿では、ダライ・ラマ 14 世の著作に現れる「心」にかんする仏教用語の英訳語とその定義的用例を示し、筆者の力量の及ぶ範囲でチベット語古典文献のなかにそれらの出典を可能な限り見出すことを目的とする。ただし今回は紙面の都合上、ダライ・ラマの文献は、チベット語と英語の対照がまとまって示されている [Dalai Lama 1999] [Dalai Lama 2005]、心に関係するダライ・ラマの発言が多い

[Dalai Lama, et al. 1992] [Dalai Lama, et al. 1999]、ダライ・ラマのチベット語文献 [Dalai Lama 2008(2007)] [Dalai Lama 2010]に限定している。

2 「心」にかんする英訳語と *emotion* の位置づけ

以下の引用は、ダライ・ラマが用いる「心」にかんする様々な仏教用語の英訳語について、チベット語を挙げつつ彼自身が最も端的に示している箇所である。

例えば、西欧の言語において、*consciousness* や *the mind* や *mental phenomena* や *awareness* と言われる。同様に、心に関する仏教哲学の文脈において、*blo* (サンスクリットで *buddhi*)、*shes pa* (*jñāna*)、*rig pa* (*vidyā*)と言われるが、これらはおおまかに *awareness*、あるいは最も広い意味で *intelligence* と訳すことができる。仏教哲学者もまた、*sems* (サンスクリットで *citta*)すなわち英語の *mind*、*rnam shes* (*viññāna*)すなわち *consciousness*、*yi* (*namas*)すなわち *mentality* あるいは *mental states* と言う。よく *consciousness* と訳されるチベット語の *rnam shes* あるいはサンスクリットでいう *viññāna* は、その英訳語よりも幅広い意味をもっており、単に意識的経験の全体を示すだけでなく、近代心理学や精神分析の学説にいう無意識(*unconscious*)の一部として理解される諸力をも意味する。さらに、*mind* にあたるチベット語である *sems* (サンスクリットの *citta*)は、単に思考(*thought*)だけでなく感情(*emotion*)の領域も含んでいる。極端な混乱なく、我々は意識の現象(*the phenomena of consciousness*)について言うことができるが、各自の言語的な制約に注意深くなる必要がある。

For example, in Western European languages, one speaks of “consciousness,” “the mind,” “mental phenomena,” and “awareness.” Similarly, in the context of Buddhist philosophy of mind, one speaks of *blo* (*buddhi* in Sanskrit), *shes pa* (*jñāna*), and *rig pa* (*vidyā*)—all of which can be roughly translated as awareness or “intelligence” in the broadest sense of the term. Buddhist philosophers also speak of *sems* (*citta* in Sanskrit), “mind” in English; *rnam shes* (*viññāna* in Sanskrit), “consciousness”; and *yi* (*namas* in Sanskrit), “mentality” or “mental states.” The Tibetan word *rnam shes*, or its Sanskrit equivalent, *viññāna* which is often translated as “consciousness,” has a broader range of application than the English term in that it covers not only the whole range of conscious experiences but also

those forces that might be recognized as part of the so-called unconscious according to modern psychological and psychoanalytic theories. Furthermore, the Tibetan word for “mind,” which *sems* (Sanskrit *citta*), covers not just the realm of thought but also that of emotion. We can speak of the phenomena of consciousness without excessive confusion, but we need to be heedful of the limitations of our respective linguistic terms. [Dalai Lama 2005: 121-122]

ここでダライ・ラマが用いている心にかんするチベット語は、*blo*, *shes pa*, *rig pa*, *sems*, *rnam shes*, *yid* の6つである。これら6つのチベット語に対応する英訳語は以下のようにまとめられる。

- *blo*, *shes pa*, *rig pa* = intelligence (in the broadest sense of the term)
- *sems* = mind (not just the realm of thought but also that of emotion)
- *rnam shes* = consciousness
- *yid* = mentality, mental states

ダライ・ラマは別のところで仏教の伝統にしたがって、「*sems* (心)、*yid* (意)、*rnam shes* (識) の3つは同じ意味 (*don gcig*)」(*sems yid rnam shes gsum don gcig*) [Dalai Lama 2005(1967): 18]だとも述べているけれども、上記引用ではこの3者の英訳語を使い分けている。

また *mind* の英訳語は以下にあるように *blo* にも当てられていると同時に、上記引用の *sems* = *mind* と同様、*thought* (思考) と *emotion* (感情) の両者を含むものとされている。

Mind にあたる言葉である *blo* は、*feeling* や *emotion* と並んで *consciousness* あるいは *awareness* の観念を含んでいる。これは感情(*emotions*)と思考(*thoughts*)が究極的には分離できないという理解を反映している。色のような質感の知覚(*perception*)でさえ情緒的な(*affective*)次元に含まれると考えられている。認知的な出来事を一切ともなわない純粋な感覚(*sensation*)という観念はない。我々は感情(*emotion*)の異なったタイプを同定することができる。血を見た時の嫌悪のような本能的なものや、貧困に対する恐れのような、より発達した理性的な(*rational*)要素もある。

The word for “mind,” *blo*, includes the ideas of consciousness, or awareness, alongside those of feeling and emotion. This reflects an understanding that emotions and thoughts cannot ultimately be separated. Even the perception of quality, like color, is held to carry within it an affective dimension. Nor is there an idea of pure sensation without any accompanying cognitive event. The inference is rather that we can identify different types of emotion. There are those which are primarily instinctual, such as revulsion at the sight of blood, and there are those which have a more developed rational component, such as fear of poverty. [Dalai Lama 1999: 30-31]

・ **blo = mind (including the ideas of consciousness, or awareness, alongside those of feeling and emotion)**

emotion にかんしてダライ・ラマは次のような説明をしている。

サンスクリットにも古典チベット語にも、近代的な言語や文化において用いられる感情(emotion)にあたる言葉がない。

Neither Sanskrit nor classical Tibetan has a word for “emotion” as the concept is used in modern languages and cultures. [Dalai Lama 2005: 175]

西洋思想では理性(reason)と情動(passions)とを切り離すが、仏教心理学は認知的な(cognitive)状態と感情的な(emotional)状態とを切り離すことをしなかった。仏教徒の観点からすると、苦しみを引き起こす(afflictive)心の状態(mental states)と苦しみを引き起こさない(non-afflictive)心の状態の区別の方が、認知的な(cognitive)ものと感情(emotions)との区別よりも一層重要である。Buddhist psychology did not differentiate cognitive from emotional states in the way Western thought differentiated the passions from reason. From the Buddhist perspective, the distinctions between afflictive and non-afflictive mental states are more important than the difference between cognitive and emotions. [Dalai Lama 2005: 175]

仏教心理学において重要な区別は、意識(consciousness)と、意識が示す様々な様相(the various modalities)、すなわち仏教用語でいう心所(mental factors)の間に設けられる。

Buddhist psychology, an important distinction is drawn between consciousness and the various modalities through which it manifests, for which the technical term in Buddhism is “mental factors.” [Dalai Lama 2005: 176]

ダライ・ラマによると現代のemotionにあたる言葉は古典チベット語にもサンスクリットにもない。なぜなら、仏教は認知的なものであるか感情的なものであるかの区別よりも、苦しみをもたらすかどうかに基づく区別を重要視したからである。彼によれば、emotion (感情) はmental factors (心所) に属するものである⁴。

3 光り輝き知るものとしての心

ダライ・ラマは mental という語について次のように定義を与えている。

我々が mental と呼ぶところの、一連の経験に属するような現象の多様性をどう定義するかが問題である。子供のころに受けた認識論についての授業を最も鮮明に覚えていて、そこでは「mental の定義は光り輝き(luminous)知る(knowing)ものである」という格言を覚えなければならなかった。初期のインドの資料から引用して、チベット人の思想家は意識(consciousness)を定義したのである。

The question is, What defines this diversity of phenomena as belonging to one family of experience, which we call “mental”? I remember most vividly my first lesson on epistemology as a child, when I had to memorize the dictum “**The definition of the mental is that which is luminous and knowing.**” Drawing on earlier Indian sources, Tibetan thinkers defined consciousness. [Dalai Lama 2005: 124]

ここにいう mental がチベット語の何にあたるかダライ・ラマは示していない。しかし、古典文献のなかにこうした定義を索めることができる。例えば、デプン僧院ロセルリン(blo gsal gling)学堂で使用されるパンチェン・ソナム・タクパ paN chen bsod nams grags pa(1478-1554)の概説書には以下のようにある。

了知(rig pa)は心(blo)の定義(mtshan nyid)である。輝き(gsal)および了知すること(rig pa)が知ること(shes pa)の定義である。心(blo)と了知(rig pa)と知ること(shes pa)の3つは同義である。

rig pa blo'i mtshan nyid/ gsar zhing rig pa shes pa'i mtshan nyid/ blo dang rig pa shes pa gsum don gcig/ [Pan chen bsod nams grags pa 2008a: 40]

了知(rig pa)は心(blo)の定義(mtshan nyid)である。心(blo)と了知(rig pa)と知ること(shes pa)と輝き(gsal ba)は同義である。

rig pa blo yi mtshan nyid yin// blo dang shes pa rig pa dang// gsar ba rnam ni don gcig yin// [Pan chen bsod nams grags pa 2008a: 109]

パンチェン・ソナム・タクパによれば、blo は rig pa によって定義され、shes pa が gsar と rig pa によって定義される。それと同時に、blo と rig pa と shes pa と gsar ba の4つは同義とされる。

この説に従えば、ダライ・ラマのいう luminous はチベット語の gsar ba にあたり、knowing はチベット語の rig pa にあたる。また、the mental は shes pa とも考えられるが、shes pa、blo、rig pa、gsar ba の4つは同義とされるから、これら4つのチベット語を概括して the mental の訳語を用いているとも考えられる。また、luminous と knowing にかんしてさらに詳しく述べられている。

二つの特徴、すなわち光輝(luminosity)・清浄(clarity)および知ること(knowing)・認識(cognizance)はインド・チベットの仏教思想において the mental として特徴づけられてきた。ここにおいて清浄(clarity)は、明らかにする(reveal)あるいは反映する(reflect)という、心的状態(mental states)の能力(ability)を意味している。対照的に、知ること(knowing)とは、顕れるもの(what appears)を知覚する(perceive)あるいは理解する(apprehend)という、心的状態の能力(faculty)を意味している。これらの質を有するすべての現象は mental とみなされる。これらの特徴は概念化するのが難しい。しかし、時空間的に計測しうる物質的対象よりも主観的で内的な現象を我々は扱っている。おそらく主観的なものを扱う際の言語的限界という困難のために、多くの初期の仏教典籍は意識(consciousness)の本質(nature)を光(light)や河の流れ(flowing river)のような隠喩によって表現したのである。光(light)の第一の特徴が照ら

し出す(illuminate)ことであるように、意識(consciousness)はその対象を照らし出すと言われる。ちょうど光において、照らし出すこと(illumination)と照らし出すもの(that which illuminates)との間に絶対的な区別がないように、意識においても知ること(knowing)や認識(cognition)のプロセスと、知るものや認識するものとの間には本質的な区別はない。光と同じように、意識においても照らし出す(illumination)という性質がある。

These two features—**luminosity, or clarity**, and **knowing, or cognizance**—have come to characterize “the mental” in Indo-Tibetan Buddhist thought. **Clarity here refers to the ability of mental states to reveal or reflect. Knowing, by contrast, refers to mental states’ faculty to perceive or apprehend what appears.** All phenomena possessed of these qualities count as mental. These features are difficult to conceptualize, but then we are dealing with phenomena that are subjective and internal rather than material objects that may be measured in spatiotemporal terms. Perhaps it is because of these difficulties—the limits of language in dealing with the subjective—that many of the early Buddhist texts explain the nature of consciousness in terms of metaphors such as light or flowing river. **As the primary feature of light is to illuminate, so consciousness is said to illuminate its objects.** Just as in light there is no categorical distinction between the illumination and that which illuminates, so in consciousness there is no real difference between the process of knowing or cognition and that which knows or cognizes. In consciousness, as in light, there is a quality of illumination. [Dalai Lama 2005: 124-125]

ダライ・ラマによれば mental は、luminosity, clarity および knowing, cognizance の2つによって特徴付けられ、前者は the ability of mental states to reveal or reflect、後者は mental states’ faculty to perceive or apprehend what appears と規定される。

また consciousness は illuminate its objects と規定され、知ること(knowing)あるいは認識(cognition)のプロセスと、知り(know)認識する(cognize)主体との本質的な違いはないとされる。ここにいう consciousness にあたるチベット語が何であるかはっきりしないが、文脈上、mental と同じくすると考えてよいであろう。

- blo, rig pa, shes pa = the mental, consciousness
- gsal ba = luminosity, clarity (the ability of mental states to reveal or reflect)

- **rig pa = knowing, cognizance (mental states' faculty to perceive or apprehend what appears)**

4 認識手段としての心

ダライ・ラマは consciousness について次のように述べている。

仏教徒の基本的態度として、存在するものとそうでないものとを区別しなければならないと考えている。もし、何かが有効な認識(valid cognition)によって確立されるならば、それは存在している。しかし、そうでなければ、それは存在していない。有効な認識(valid cognition)が意味するものは、意識(consciousness)である。ここでは意識を、対象を知覚する(perceive)知覚(perception)であり、対象にかんして誤り(mistaken)のない知覚である、と私は定義している。対象は、意識がそれを知覚する仕方に応じて、その機能(function)を実際に果たすことができる。

I think the basic Buddhist attitude is we have to discriminate between things that are existent and things that are not. We determine that something exists by whether or not it is established by a valid cognition or not. If something is established by a valid cognition, it is existent; if it is not, then it is nonexistent. **What is meant by valid cognition is consciousness. I am defining consciousness here as a perception that perceives the object and is not mistaken with respect to the object; that is, the object can indeed perform its function in accordance with the way consciousness perceives it.** [Dalai Lama, et al. 1992: 35-36]

ここに見受けられる英訳語に相当するチベット語は『量評釈』の認識手段(thsad ma)の定義に求めることができる。

認識手段(tshad ma)は欺きのない(bslu med)知ること(shes pa)である。効果を作用させる能力に(don byed nus par)住しているものは欺かない。

tshad ma bslu med can shes pa// don byed nus par gnas pa ni// mi slu [chos kyi grags pa (Dharmakīrti) 1986a: 107b3]

未知の対象(don)を明らかならしめる(gsal byed)のもまた。

ma shes don gyi gsal byed kyang/[chos kyi grags pa (Dharmakīrti) 1986a: 107b5]

上記引用における、「欺きのない(bslu med)知ること(shes pa)」および「未知の対象(don)を明らかならしめる(gsal byed)」が『量評釈』における認識手段(tshad ma)の定義として知られている[船山 2012: 95-96][ツルティム・藤仲 2010: 133]。

上述のダライ・ラマの英文のうち、『量評釈』の「未知の対象(don)を明らかならしめる(gsal byed)」に相当する箇所は見いだせないが、valid cognition が tshad ma に相当し、perception that perceives the object and is not mistaken with respect to the object が ma bslu med can shes pa に相当することが分かる。また、the object can indeed perform its function in accordance with the way consciousness perceives it は don byed nus pa にかんする説明になっていると考えられる。ここで “What is meant by valid cognition is consciousness”における consciousness の原語が問題となるが、それは『量評釈』における以下の定義から判明する。

心(blo)は認識手段(tshad ma)である。

blo ni tshad ma nyid// (Dharmakīrti) 1986a: 107b4]

blo は tshad ma であると規定されるから、consciousness は blo に相当する。
以上をまとめると次のようになる。

- tshad ma = valid cognition
- ma bslu med can shes pa = perception that perceives the object and is not mistaken with respect to the object
- don byed nus pa: the object can indeed perform its function in accordance with the way consciousness perceives it
- blo = consciousness (what is meant by valid cognition)

またダライ・ラマは consciousness について以下のようにも述べている。

ある観点からして、仏教徒による意識(consciousness)の定義は、意識に現れる対象との一致を生み出す主観的な作用因(subjective agent)である。対象の刺激の力をとおして、意識は対象と一致する様相で生じることができる。

The Buddhist definition of consciousness, from one point of view, is a subjective

agent that has the potential to arise correspondent to an object that appears to it. Through the force of the stimulus of the object, consciousness has the ability to arise in an aspect corresponding to the object. [Dalai Lama, et al. 1992: 194]

ここに見られるのは、上述の認識手段(tshad ma)の文脈とはことなり、『阿毘達磨俱舍論』の以下の定義に近い。

識(rnam shes)は一つ一つを(so sor)それぞれ(rnam)了知するもの(rig pa)である。対象(yul)と対象における一つ一つをそれぞれ了知し焦点をあてること(dmigs)が識蘊(rnam par shes pa'i phung po)と言われる。

rnam shes so sor rnam rig pa// yul dang yul la so sor rnam par rig cing dmigs pa ni
rnam par shes pa'i phung po zhes bya'o// [Dbyig gnyen(Vasbandhu) 1986a: 33b7]

- **rnam shes = consciousness(a subjective agent that has the potential to arise correspondent to an object that appears to it)**

先述の認識手段(tshad ma)にかんしてグライ・ラマは以下のような説明もしている。

中観帰謬論証派によれば、直接知覚(direct perception)には 3 つのタイプがある。瑜伽行派は直接知覚には、感覚的(sensory)知覚・心的(mental)知覚・ヨーガ的(yogic)知覚・統覚(apperception)あるいは自己認識的(self-cognizing)知覚の 4 つのタイプがあると説く。この統覚の存在を主張する理由は、心的現象(mental phenomena)の本来的な存在に対する瑜伽行派の根本的な信念にある。しかし、中観帰謬論証派はそれに反論する。というのも、中観帰謬論証派はこの統覚の存在を認めず、感覚的知覚・心的知覚・ヨーガ的知覚という 3 つの直接知覚しか認めない。

According to the Prasangika presentation, there are three types of **direct perception**. Yogacharins present four types of direct perception: **sensory, mental, yogic, and apperception or self-cognizing**. The reason for asserting the presence of this apperception is the fundamental Yogacharin belief in the inherent existence of mental phenomena, which Prasangikas refute. Because **the Prasangikas don't**

accept the existence of this apperception, they acknowledge only three types of direct perception: sensory, mental, and yogic. [Dalai Lama, et al. 1992: 47]

中観帰謬論証派によると、生物学者のいう感覚(sensation)や、ある種の知覚(perception)の認識(awareness)のような主観的経験はどんなものでも直接的な心的知覚(direct mental perception)とみなされる。それに意識(consciousness)の他のタイプがあり、仏教における予知(precognition)や高次の意識(heighted awareness)である。これらすべての経験もまた直接的な心的知覚である。ヨーガ的直接知覚は説明するのが難しいが、別のカテゴリーに属するとだけ言っておきたい。

According to the Madhayamika Prasangikas, anything that is subjective experience—like the biologists' sensation, awareness of some kind of perception—is regarded as direct mental perception. Then there are other types of consciousness; in Buddhism we have precognition or heightened awareness. All these kinds of experiences are also direct mental perceptions. Yogic direct perception is not easy to describe; suffice it to say that it is a separate category. [Dalai Lama, et al. 1992: 47]

これら英訳語の原語を探るにあたってジャムヤン・シェーパ2世クンチョク・ジグメ・ワンポdkon mchog 'jigs med dbang po(1728-1791)の『学説宝環』(*grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa rin po che'i phren ba*)が参考になる。同書に従えば、唯識派(sems tsam pa)はrnam bden paとrnam brdzun paの2つ、中観派(dbu ma pa)は自立論証派(rang rgyud pa)と帰謬論証派(thal 'gyur ba)の2つ、このうち自立論証派(rang rgyud pa)は瑜伽行中観自立論証派(rnal 'byor spyod pa'i dbu ma rang rgyud pa)と経量行中観自立論証派(mdo sde spyod pa'i dbu ma rang rgyud pa)に分けられる。これらのうち中観帰謬論証派(thal 'gyur ba)がみとめる認識手段(tshad ma)について以下のように説明されている⁵。

認識手段(tshad ma)には直接知覚の認識手段(mngon sum tshad ma)と推理の認識手段(rjes dpag tshad ma)の2つ。直接知覚の認識手段には感覚器官の直接知覚の認識手段(dbang po'i mngon sum gyi tshad ma)、心の直接知覚の認識手段(yid kyi mngon sum gyi tshad ma)、ヨーガの直接知覚の認識手段(rnal 'byor

mngon sum gyi tshad ma)の3つがある。自己認識の直接知覚(rang rig mngon sum)を主張しない。

tshad ma la mngon sum tshad ma dang/ rjes dpag tshad ma gnyis/ mngon sum gyi tshad ma la dbang po'i mngon sum gyi tshad ma/ yid kyi mngon sum gyi tshad ma/ rnal 'byor mngon sum gyi tshad ma dang gsum yod/ rang rig mngon sum mi 'dod cing/ [dkon mchog 'jigs med dbang po 2005(1981): 77-78]

これらから、先のダライ・ラマの英訳語とチベット語を対照させると次のようになる。

- mngon sum tshad ma = direct perception
- dbang po'i mngon sum gyi tshad ma = sensory direct perception
- yid kyi mngon sum gyi tshad ma = mental direct perception
- rnal 'byor mngon sum gyi tshad ma = yogic direct perception
- rang rig mngon sum = apperception or self-cognizing

Perception はダライ・ラマによって次のようにも説明されている。

By “perception” we mean here a nonconceptual valid awareness. [Dalai Lama, et al. 1992: 40]

これにかんして、例えばパンチェン・ロサン・タクパは次のように述べている。

概念(rtog pa)を離れ、錯誤のない(ma 'khrul ba)了知(rig pa)が直接知覚(mngon sum)の定義である。概念を離れ、錯誤がなく、新しく(gsar du)欺かない(mi slu ba) 了知(rig pa)が直接知覚の認識手段(mngon sum gyi tshad)の定義である。

rtog pa dang bral zhing ma 'khrul ba'i rig pa mngon sum gyi mtshan nyid/ rtog pa dang bral zhing ma 'khrul ba'i gsar du mi slu ba'i rig pa mngon sum gyi tshad ma'i mtshan nyid/[Pan chen bsod nams grags pa 2008a: 41]

これと同様の定義はダルマキールティ『正理滴』(rigs pa'i thigs pa zhes bya ba'i rab tu byed pa)において次のように見られるものである。

正しい(yang dag pa)知ること(shes pa)は2種であつて、直接知覚(mngon sum)と推理(rjes su dpag pa)である。そのうち直接知覚は概念(rtog pa)を離れ、錯誤のない(ma 'khrul ba)ものである。概念とは、知ること(shes pa)において言語的表現(brjod pa)と結びつき得るもの('drer rung ba)が顕現したもの(snang ba)であつて、[直接知覚とは]それから離れたものである。([]内筆者)

yang dag pa'i shes pa ni rnam pa gnyis te/ mngon sum dang rjes su dpag pa'o// de la mngon sum ni rtog pa dang bral zhing ma 'khrul ba'o// rtog pa ni/ shes pa la brjod pa dang 'drer rung ba snang ba ste de dang bral ba'o//[chos kyi grags pa (Dharmakīrti) 1986b: 231a2]

このダルマキールティの定義は以下に引用するディグナーガ『量集論』における定義に「錯誤のない(ma 'khrul ba)」という条件を付け加えたものであると同時に、概念(rtog pa)の定義もディグナーガを踏襲しない独自のものであることが知られている[船山 2012: 99]。

名前(ming)や系統(rus)などに結びつく概念(rtog pa)から離れたものが直接知覚(mngon sum)である。

ming dang rus sogs su sbyor pa'i// rtog pa dang bral mngon sum mo//[Phyogs kyi glang po(Dignāga) 1986:1b4]

これらから、先のダライ・ラマの英訳語とチベット語を対照させると次のようになる。

- mngon sum = perception
- rtog pa dang bral = nonconceptual
- rtog pa = concept
- ma 'khrul ba'i rig pa = valid awareness

5 おわりに

以上、限られた文献のなかではあるが、ダライ・ラマ 14 世の著作に現れる「心」にかんする仏教用語の英訳語とその定義的用例を示し、筆者の力量の及ぶ

範囲でチベット語古典文献のなかにそれらの出典を可能な限り見出すことを試みてきた。

現在筆者は、分野横断的研究での使用を視野に入れて、英訳語を見出し語としたデジタル仏教語彙集の作成を試みており、これについて「第 96 回人文科学とコンピュータ研究会発表会」⁶にて発表した。これは東京大学教授斎藤明氏を中心として作成された「仏教用語の用例集 (バウツダコーシャ) および現代基準訳語集」⁷の方法論から多大なる影響を受け、ダライ・ラマが用いる英訳語を中心として構築を試みているものである。本稿にて扱えなかった文献に見いだせるダライ・ラマの英訳語等については別の機会で発表、あるいは現在構築中のデータベースに組み込めたと考えている。

<キーワード>ダライ・ラマ 14 世、心、感情、認識手段

文献表

Dalai Lama 1991a, "The Buddhist Concept of Mind," translated by Geshe Thupten Jinpa, *Mind Science: an East-West Dialogue*, edited by Daniel Goleman and Robert A.F. Thurman, Wisdom Publications, Boston, pp. 13-18.

———, et al. 1991b, "Dialogue: Buddhism, Neuroscience, & the Medical Sciences," *Mind Science: an East-West Dialogue*, edited by Daniel Goleman and Robert A.F. Thurman, Wisdom Publications, Boston, pp. 21-35.

———, et al. 1992, *Gentle Bridges, Conversations with the Dalai Lama on the Science of Mind*, edited by Jeremy W. Hayward, Francisco J. Varela, Shambhala Publications, Boston.

———, et al. 1997, *Sleeping, Dreaming, and Dying, An Exploration of Consciousness with the Dalai Lama*, edited and narrated by Francisco J. Varela, Wisdom Publications, Boston.

———, et al. 1999, *Consciousness at the Crossroads, Conversations with The Dalai Lama on Brain Science and Buddhism*, edited by Zara Houshmad, Robert B. Livingstson and B. Alan Wallace, Snow Lion Publications, New York.

———1999, *Ethics for the New Millennium*, Riverhead Books, New York.

———, et al. 2002, *Visions of Compassion, Western Scientist and Tibetan Buddhists Examine Human Nature*, edited by Richard J. Davidson and Anne Harrington, Oxford University Press, New York.

———, et al. 2004(2003), *Destructive Emotions, A Scientific Dialogue with the Dalai*

- Lama*, narrated by Daniel Goleman, Bantam Books, New York.
- , et al. 2004, *The New Physics and Cosmology, Dialogues with the Dalai Lama*, edited by Arthur Zajonc, Oxford University Press, New York.
- 2005(1967), *legs bshad blo gsar mig 'byed ces bya ba bzhugs so*, bod gzhung shes rig dpar khang, Delhi, India.
- 2005f, *The Universe in a Single Atom*, Morgan Road Books, New York.
- 2008(2007), *bod kyi nang chos ngo sprod snying bsdus*, sku bcar rnam par rgyal ba phan bde legs bshad gling grwa tshang gi shes yon lhan tshogs, India.
- , et al. 2009, *Mind and Life, Discussion with the Dalai Lama on the Nature of Reality*, edited by Pier Luigi Luisi and Zara Houshmand, Columbia University Press, New York.
- 2010, *bod kyi nang chos ngo sprod snying tig*, sku bcar rnam par rgyal ba phan bde legs bshad gling grwa tshang gi shes yon lhan tshogs, India.
- , et al. 2011, *The Mind's Own Physician*, edited by Jon Kabat-Zinn and Richard J. Davidson, Mind & Life Institute, New Harbinger Publications, U.S.A..
- Bohm, David 2003, *The Essential David Bohm with a reminiscence by H. H. The Dalai Lama*, edited by Lee Nichol, Routledge, London.
- Byams pa(Maitreya) 1986, *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i tshig le'ur byas pa*, sde dge bstan 'gyur, sems tsam, phi, CD-Rom, W23703-1439, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Chos kyi grags pa(Dharmakīrti) 1986a, *tshad ma rnam 'grel gyi tshig le'ur byas pa*, sde dge bstan 'gyur, tshad ma, ce, CD-Rom, W23703-1490, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- 1986b, *rigs pa'i thigs pa zhes bya ba'i rab tu byed pa*, sde dge bstan 'gyur, tshad ma, ce, CD-Rom, W23703-1490, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Dbyig gnyen(Vasbandhu) 1986a, *chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa*, sde dge bstan 'gyur, mngon pa, ku, CD-Rom, W23703-1456, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- 1986b, *dbus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa*, sde dge bstan 'gyur, sems tsam, bi, CD-Rom, W23703-1440, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Dkon mchog 'jigs med dbang po 2005(1981), *grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa rin po che'i phren ba bzhes bya ba bzhugs so*, bod gzhung shes rig dpar khang, India.

- Harvey, Peter 1994(1989), "Consciousness Mysticism in the Discourses of the Buddha," *The Yogi and the Mystic*, edited by Karl Werner, Routledge Curzon, London, pp. 82-102.
- Lee, Joon 2006, "Cross-Cultural Consensus Between Buddhist Reality and Modern Science," *International Journal of Buddhist Thought & Culture February*, Vol.6, International Association for Buddhist Thought & Culture, pp.25-51.
- Lati Rinbochay 1980, *Mind in Tibetan Buddhism*, translated by Elizabeth Napper, Snow Lion Publications, New York.
- PaN chen bsod nams grags pa 2008a, *rigs lam sgo brgya 'byed pa'i 'phrul gyi lde mig dang po bzhugs so*, 'bras spungs blo gsal gling dpe mdzod khang, India.
- 2008b, *rigs lam sgo brgya 'byed pa'i 'phrul gyi lde mig gnyis pa bzhugs so*, 'bras spungs blo gsal gling dpe mdzod khang, India.
- Payne, Richard K. 2002a, "Buddhism and Cognitive Science: Contributions to an Enlarged Discourse, Symposium Proceedings," *The Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series, No. 4, Fall, pp. 1-13.
- 2002b, "Cognitive Theories of Ritual and Buddhist Practice: An Examination of Ilkka Pyysiainen's Theory," *The Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series, No. 4, Fall, pp. 75-90.
- Phyogs kyi glang po(Dignāga) 1986, *tshad ma kun las btus pa zhes bya ba'i rab tu byed pa, sde dge bstan 'gyur, tshad ma, ce*, CD-Rom, W23703-1490, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Rosch, Eleanor 2002, "'How do I know thee? Let me count the ways': Meditation and Basic Cognitive Processes," *The Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series, No. 4, Fall, pp. 33-53.
- Tainer, Steven A. 2002, "Studying 'No Mind': The Future of Orthogonal Approaches," *The Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series, No. 4, Fall, pp. 55-74.
- Thogs med(Asaṅga) 1985, *chos mngon pa kun las btus pa, sde dge bstan 'gyur, sems tsam, ri*, CD-Rom, W23703-1450, Tibetan Buddhist Resource Center, New York.
- Yongs 'dzin phur lcog pa 2001, *rigs lam 'phrul gyi lde mig ces bya ba bzhugs so*, Tibetan Buddhist Philosophical Series Book 7, Sera Je Library, India.
- Zam gdong rin po che 2007, "nang chos dang tshan rig las 'phros pa'i 'bel gtam," *sgron me'i ched deb gnyis pa*, sgron me'i rtsom sgrig khang, India.
- Wallace, B. Alan 2002, "A Science of Consciousness: Buddhism(1), the Modern

West(0),” *The Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series, No. 4, Fall, pp. 15-32.

高松宏實(クンチョック・シタル) 2010 「近代におけるチベット仏教の直面する問題—チベット仏教と近代—」、『現代密教』第21号、智山伝法院、159頁から174頁。

高橋秀裕 2009 「宗教と科学の対話を求めて—伝統教学に新しい知的伝統を生み出す方途はあるのか?—」、『現代密教』第20号、智山伝法院、127頁から140頁。

ツルティム・ケサン(白館戒雲)・藤仲孝司 2010 『チベット仏教 論理学・認識論の研究Ⅰ』、人間文化研究機構・総合地球環境学研究所。

野家伸也 2008 「フランススコ・ヴァレラにおける科学と宗教 —「自然化された現象学」の立場からの「知の統合」の試み—」、『金城学院大学紀要』第12号、45頁から68頁。

船山徹 2012 「認識論—知覚の理論とその展開」、『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』、春秋社、91頁から120頁。

村上保壽 1992 「宗教と科学—「いのち」の現代史的問題と密教」、『密教文化』Vol. 1992(1992) No. 180、密教研究会、1頁から17頁。

———1995 「密教と生命科学の対話」、『密教文化』Vol. 1995(1995) No. 189、密教研究会、92頁から100頁。

¹ 以下はこれまで開かれた会合の開催年とそのテーマを列挙したものである。1987: Dialogues between Buddhism and the Cognitive Sciences. 1989: Dialogues between Buddhism and the Neurosciences. 1990: Emotions and Health. 1992: Sleeping, Dreaming, and Dying. 1995: Altruism, Ethics, and Compassion. 1997: The New Physics and Cosmology. 1998: Epistemological Questions in Quantum Physics and Eastern Contemplative Sciences at Innsbruck University. 2000: Destructive Emotions 2001: Transformations of Mind, Brain and Emotion at the University of Wisconsin. 2002: The Nature of Matter, The Nature of Life. 2003: Investigating the Mind: Exchanges between Buddhism and Biobehavioral Science on How the Mind Works, co-sponsored by the McGovern Institute at Massachusetts Institute of Technology. 2004: Neuroplasticity: The Neuronal Substrates of Learning and Transformation. 2005: Investigating the Mind: The Science and Clinical Applications of Meditation, co-sponsored by Johns Hopkins Medical University and Georgetown Medical Center. 2006: Public Talk with HH Dalai Lama in Denver. 2007: Mindfulness, Compassion and the Treatment of Depression, co-sponsored by Emory University. 2007: The Universe in a Single Atom. 2008: Investigating the Mind-Body Connection: The

Science and Clinical Applications of Meditation, hosted by Mayo Clinic. 2009: Latest Findings in Contemplative Neuroscience. 2009: Attention, Memory, and the Mind. 2009: Educating World Citizens for the 21st Century: Educators, Scientists and Contemplatives Dialogue on Cultivating a Healthy Mind, Brain and Heart, co-sponsored by Harvard University Graduate School of Education, Stanford University School of Education, Pennsylvania State University College of Education, University of Virginia Curry School of Education, University of Wisconsin-Madison School of Education, the American Psychological Association and the Collaborative for Academic, Social and Emotional Learning. 2010: Latest Findings in Contemplative Neuroscience, co-sponsored by the University of Wisconsin-Madison's Center for Investigating Healthy Minds. 2010: Altruism and Compassion in Economic Systems: A Dialogue at the Interface of Economics, Neuroscience and Contemplative Sciences, co-sponsored by the University of Zurich. 2011: Ecology, Ethics and Interdependence.

² 科学と仏教の対話に対するダライ・ラマの期待感以下の発言から知られる。「一般的に、宇宙論・核物理学・亜原子物理学、それにももちろん心理学・神経生物学といった分野において、仏教徒の説明と交互に接続できるものがあると私は考えている(Generally I find in the fields of cosmology, nuclear physics, subatomic physics, then, of course, psychology, neurobiology, these fields, there is a cross-connection to Buddhists' explanations. [Dalai Lama, et al. 1999: 47])。仏教と心理学との間の対話や交互コミュニケーションが非常に価値あるものとなりうる二つの分野がある。一つは、心それ自身や思考のプロセスや概念化の本質を探ることのうちにある。簡単に言えば、心の本質に真正面から切り込んで調べるということである。二つ目は、特に治療目的との関係で心の本質を探ることであって、精神的にアンバランスになったり機能障害になったりしやすい人々を対象にして、彼らがより健康的になれる方法を探るものである(There are two general areas for which dialogue or cross-communication between Buddhism and psychology could be very valuable. One is in the investigation of the nature of mind itself, of the thought processes, conceptualization—simply straight investigation into the nature of mind. The second one is investigation of the nature of mind specifically in relation to therapeutic purposes, dealing with people who are subject to some mental imbalance or dysfunction—how to bring them to better health. [Dalai Lama, et al. 1992: 115])。

³ tshan rig gis nang don rig pa la brten pa dang/ nang don rig pas tshan rig la brten pa yin na 'jig rten gyi phan bde chen po zhig bsgrub thub rgyu red/ [zam gdong rin po che 2007: 50]

⁴ ダライ・ラマが用いる五十一心所の英訳語等については拙論(TSUJIMURA Masahide 2012, "The English translation of shes rab (prajñā) by the 14th Dalai Lama and the list of English words for the fifty-one mental factors (sems byung lnga bcu rtsa gcig)," 『高野山大学密教文化研究所紀要』, 第 25 号, pp. 75-114.

[<http://www.koyasan-u.ac.jp/mikkyobunka/blog/documents/kiyo25/tsujimura.pdf>])にて論じた。

⁵ ちなみに『学説宝環』によると、自立論証派は瑜伽行・経量行ともに自己認識の直接知覚(rang rig mngon sum)を認める[dkon mchog 'jigs med dbang po 2005(1981): 66]。

⁶

<http://www.jinmoncom.jp/index.php?%E9%96%8B%E5%82%AC%E4%BA%88%E5%A%E%9A%2F%E7%AC%AC96%E5%9B%9E>

⁷ <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/intetsu/html/index.html>